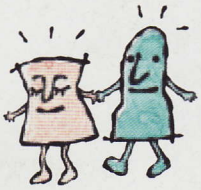
平成16年1月1日発行　隔月(偶数月)1日発行　ライフルスポーツ第344号　昭和53年2月25日第3種郵便物認可　ISSN　0389-4339

THE RIFLE SPORTS

ライフルスポーツ

2004 1
第344号



- 菊地会長　新年のご挨拶
- 第58回国民体育大会
- 平成15年度全日本ライフル射撃競技選手権大会(50m・10m)

toto
FOR ALL SPORTS OF Japan

(社)日本ライフル射撃協会

伝聞録

学連復活のとき

そのとき全日本学生射撃連盟は自ら解散を決意した。昭和二十年九月二日、東京湾に浮かぶ米国戦艦ミズーリー号甲板上、我国政府代表は連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサーの面前で降伏文書に調印したのである。これにより大日本帝国は連合国最高司令官総司令部（GHQ）の間接統治下（占領下）に入ったのであった。傷心・動転の日々が過ぎて行く。母体を持たない射撃学生等は表立った事も出来ず、また終戦直後で食糧事情が極悪であった事から、中には狩猟会的な動きに甘んじる者もでてくる有様に陥った。こうした中、戦前の学連創設功労者師尾源蔵（明治大学OB、愛称モロゲン）が中心となって関東地区では安齋 實・芹沢新平（両者明治大学OB）、町田 勉・谷 敏太郎（両者慶應義塾大学OB）、河野武典（旧姓和田、國學院大學OB、関東州大連出身、幻の東京オリンピック代表に選考、長兄は早稲田大学射撃部主将）ほか数多くの大学OB有志が立ち上がり、勇気を持って学生射撃復活の為の強力な精神支援を学生に発信し続けたのである。この啓蒙から自主的に体育射撃部として名乗りをあげる大学がポツリポツリと出始め、それはやがて十数校を数えられるまでになったのであった。

復活学連結成記念大会風景。標的付近に審査員がいるが、銃刀法が存在しない大らかな時代であった。

団体優勝に輝いた國學院大學に優勝カップ・賞状が授与された。誇らしげに抱えられている二挺の銃は賞品のシェリダンのポンプ式である。

米国トルーマン大統領の米ソ冷戦状態到来宣言から五年の昭和二十七年四月二十八日、サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約は同時に発効された。それは日本が、引き続き米国占領軍の駐留を認めながらも主権を回復し、独立国に復帰した瞬間であった。このころの日本経済は朝鮮戦争の特需もあって大東亜戦後の荒廃から漸く立ち直りかけてきたときでもあった。

小石川射場（日ラ本部）に東西の大学射撃部部員・OBが幾度も集い、人事を尽くして日本学生ライフル射撃連盟を正式に結成し復活を果したのは昭和二十八年六月二十八日の事である。学連会長に東京大学OBの木梨信彦、理事長に芹沢新平、副理事長に河野武典、幹事長に明治大学部員の横山長幸という堅固かつ積極果敢に動ける陣を敷き飛翔に入ったのである。そして連盟最初の行事として同年九月十三日、國學院大學の澁谷常磐松運動場で学連結成記念大会を開催した。

早朝から降り続いていた小雨がにわかに上がり澄み渡った碧空の下、午前十時、日本学生ライフル射撃連盟主催、読売新聞社後援の学連結成記念大会は國學院大學石川岩吉学長による始射式、文部省教育局の西田体育課長並びに師尾日本ライフル射撃協会長祝辞の後、横山部員の選手宣誓で開幕となり、東西十一の大学すなわち、青山学院大学、関西大学、慶應義塾大学、芝浦工業大学、中央大学、同志社大学、法政大学、明治大学、立命館大学、早稲田大学、國學院大學の各選手は学連復活を記念する優勝杯奪取を目差して伏射を開始した。使用銃は空気銃であり殆どが中折式、数挺がポンプ式である。三十年式や三十八年式の軍用小銃を使用してい

た戦前の大会に比べるといささか迫力に欠けるが、それでも選手・役員はお互いの顔を見合って無言で「ウン！」とうなずきあった。皆は戦後復活の烽火を揚げ、輝ける将来への第一歩をしるす場面にたずさわれた事に感謝し、そして深い充足感を味わったのであろう。　なお、大会競技役員には昭和十七年晩秋、帝国陸軍習志野射撃場で戦前の最後の学生王者に輝いた國學院大學OB平尾旨剛も駆けつけた。

さて、競技結果は國學院大學（平山・木本・袖山・天野・中島）が210点を積み上げて団体優勝杯を獲得、準優勝に205点の明治大学、3位には192点の同志社大学が輝いた（④中央大学181点 ⑤青山学院大学152点 ⑥芝浦工業大学129点 ⑦慶應義塾大学122点⑧早稲田大学108点 ⑨立命館大学85点　関西大学、法政大学は団体戦棄権）。そして栄えある個人優勝には青山学院大学の近藤選手が輝き、準優勝に明治大学の黒沢選手、3位には國學院大學の中島選手が夫々の栄冠を手にした。

表彰式は終わり夕焼けの運動場では一大ページェントが繰り広げられた。各大学は円陣を作り、いつまでもいつまでも校歌、同期の桜、予科練のうたを精一杯歌い続けるのであった…。

＜後書＞

此処にご登場いただいた先輩諸氏の半数以上は、まだまだ見果てぬ夢を我々に託して他界された。今年は学連が復活して50年、再来年には学生射撃連盟が誕生してから80年になる。戦後、GHQは日本の道程全てを否定し民主化政策をドシドシ実施した。戸惑いの日々、その時から我々は「自由はその自由によって拘束されるという本質の認識を怠ると利己主義に陥る」との危惧を持っていたはずである。幸い体育会系にはその気象は見られない。しかし、我々は時には過去を振り返り、先達から語り継がれた教訓を糧にして、新しきを知り前進して行きたいものである。

◎過去37年間で「昔のお話し」をして下さった方々

安齋 實、芹沢新平、河野武典、百束秀雄、飯田喜一郎、鈴木重幸、平尾旨剛、岡田伝三、平山八郎、中島 稔、安達謙司、神津邦男、伊藤 寛、金子俊夫、黒羽真信

◎写真提供者＝北條俊朗、神津邦男

◎参考文献＝日本ライフル射撃協会史、読売新聞、日刊スポーツ、東京日日新聞、大日本百科事典（小学館編纂）、國學院大學学報、OB会機関誌「友彈」

平成15年10月13日

文責　國學院大學射撃部監督 太田寛道

昭和三十年、日本ライフル射撃協会と学連の合同会。（小石川）